

「理解」のための評論文指導

——「コンテキスト」「パラドックス」などを例にして——

加藤直志

はじめに

二〇〇四年度から二〇〇六年度まで三年間、県立高校^①、二〇〇七年度からは、国立大学の附属学校^②に勤務している。当然のことながら、学校が変われば、学校をとりまく状況や生徒の学力などが異なるため、たとえ同一の教材を用いたとしても、指導の方法は異なる。その一方で、どちらの学校でも、生徒の語彙力が乏しく、難解な単語が並ぶと、途端に理解不能に陥ってしまう場面に何度か遭遇した。本稿では、特に高等学校現代文分野における評論文指導の実践例を紹介するが、評論文教材について生徒に感想を求めると、「難しい言葉ばかりで、全然わからない。読む気にならない。」と訴えることが多い。現代文分野といえども、生徒達にとっては、英語や古文に近い感覚があるのである。そこで、本稿では、評論文指導

のなかでも、難解な語、特に「コンテキスト」や「パラドックス」などといった抽象概念を生徒に理解させるためにどのような指導方法を用いたのかを中心に報告する。

また、実際の教育現場では、進路指導、生徒指導などと連動しながら教科指導を行っている。本稿では、この点についても触れることとする。

一、教科指導の背景にあるもの

とりわけ普通科高校においては、進路指導と教科指導が一体化している面があるため、教科指導の実践報告の前に、前任校での進路指導部の業務に触れておく。私自身、二〇〇六年度第二学年進路指導部の一員として、いくつかの業務を実際に担当した。

(一) 補習授業や学習会に関する業務（生徒募集、クラス編成、

時間割作成など)

(二) 模擬試験に関する業務(学校で実施する際の使用教室の割り振り、業者との折衝、成績処理、傾向分析など)

(三) 進路意識向上のための業務(進路ニュース作成、進路資料の提供、大学説明会への参加など)

(四) 進路相談に関する業務(進路希望調査の実施・集計、個別相談など)

(五) 就業体験(インターンシップ)に関する業務(インターンシップ推進会議への出席、受け入れ先事業所との折衝、生徒への指導など)

(六) 就職に関する業務(公共職業安定所との情報交換、求人票の整理、面接指導など)

「大学全人」^③時代を控え、大学進学が比較的容易になりつつあるなか、前任校には、大学進学を希望する生徒だけではなく、専門学校進学や就職を希望する生徒も一定数おり、「自分にとって本当に納得できる進路」を考えさせたり、安易な選択の結果、フリーターやニートになってしまうことを防ぐことを主眼において指導した。例えば、(三)の進路ニュースでは、大学入試の制度の解説のほか、正規の職員・従業員とパート・アルバイト雇用者との収入格差を表したグラフなどを掲載し、進路意識の向上を目指した。

「理解」のための評論文指導

また、現在の多くの高校における進路指導において、避けて通れないことがある。先程、「大学全人」時代という言葉を用いたが、

高校においては、既に全入時代を迎えている。さらに、近年の生徒数の減少も加わり、多くの学校が安定的に入学希望者を集めることに躍起になっているが、そのためには、卒業後の進路を保証することが極めて重要である。多くの保護者(や生徒)にとって、過去の進路実績は、行事や部活動の取り組み以上に、学校を評価する大きな指標として機能しているからである。その結果、普通科高校では、「進路指導」教科指導「受験指導」となる傾向があり、より端的に言えば高校が予備校化する傾向にある。このような背景のもとで起こったのが、必修科目の未履修^⑤や合格者数の水増し^⑥といった問題である。

本稿で紹介する実践報告も、このような現状と全く無関係ではないため、はじめに触れておくこととした。

一、評論文指導の実践例① 〈前任校の場合〉

対象…愛知県立岡崎東高等学校第一学年(二〇〇五年度)

科目…国語総合

使用教材…鷲田清一「自分・この不思議な存在」^⑦

ねらい…a.漢字の読み書きや語彙力の向上。

- b. 評論文を正確に読解する力をつける。
 c. 抽象的な内容について考えることで、思考力をつける。

クラスの展開・分割などを行わずに授業を行ったため、対象生徒数は各クラス約四十名。従って、通常の講義形式で授業を実施した。紙幅の都合上、すべてを紹介することはできないので、一部分に絞って実践例を報告する。教材の該当箇所を引用する。

このように考えてくると、わたしがだれであるかということとは、わたしがだれでないかということ、つまりだれを自分とは異なるもの（他者）と見なしているかということ、背中合わせになっていることがわかる。ところが、わたしが（ア）それによって他者との差異を確認するその（イ）意味の軸線がわたしたちによって共有されているところでは、この軸線が（ウ）その形成の歴史を忘却して「自然」的なものと見なされ（ここから「自然」が規範としての意味を持ち始める）、それを共有しないものは、わたしたちではないもの＝「普通」でないものとして否認される。「普通」ということは（エ）世界の解釈の体系を共有しているということにすぎないにもかかわらず、である。（オ）わたしたちが自分の存在に形を与えていくこのプロセスは、だから同時に、きわめて政治的なプロセスでもあ

る。それは、常に解釈の規準を提示し、それを共有できないものは排除し、それをはずれるものには欠陥とか劣性といった否定的なまなざしのもとで自らを見ることを強いる。

（一三三頁十五行目～一二四頁九行目）^⑨

一読すればわかるように、哲学的で難解な文章である。昨今の大学入試、またその影響下にある、予備校などが実施する模擬試験では（高一・二向けのものであっても）、このような文章が頻繁に出題される。高等学校、とりわけ普通科における評論文の授業では、こうした文章を読み取る力を付けさせることが求められている。

授業の展開は次の通り。（一）範読↓（二）難解語・重要語の確認↓（三）生徒による音読↓（四）発問・補足説明・板書↓（五）評価。以下、詳細を述べる。

（一）範読

読み方がわからない漢字に振り仮名をつけるよう指示した上で、教師が範読をする。

（二）難解語・重要語の確認

難解語・重要語を教師が指摘する。生徒を指名し、意味を問う。わからない場合は、国語辞典で調べさせる。ただし、辞書による説明では分かりにくい語や、より丁寧に説明したい語については、（四）の段階で説明することもあった。引用箇所であれば、「差異」

「軸線」「忘却」「規範」「否認」「劣性」などの意味を確認させた。

(四) 発問(生徒を指名して答えさせたもの)・補足説明(生徒を指名して答えさせるには難し過ぎると判断し、教師が解説したもの)

【発問例①】

わたしたちは、どのような時に、「自然」「普通」とみなすのか。

あるいは、どのような時に、「自然」「普通」でないとみなすのか。

(解答は、わたしがそれによって他者との差異を確認するその意味の軸線がわたしたちによって共有されているとき。)

【発問例②】

傍線(ア)「それ」の指し示しているものは何か(指導書^⑩にあり)。

(解答は、他者との差異を確認するその意味の軸線。)

【発問例③】

傍線(イ)「意味の軸線」とは何か(指導書にあり)。(解答は、

他者との差異を確認する際、その基準となるもの。)

【補足説明例①】

傍線(ウ)「その形成の歴史」とは、「これが普通(自然)だ」という基準は、地球が出来たときから決まっているわけではなく、ある時代、ある時点で、何らかの理由・事情により、形成されたものに過ぎないということ。生徒に説明する際には、それぞれの国や民族によって固有である食文化を、それを共有しない人々が一方的に

批判する例などを引き合いに出し、よりわかりやすい工夫した。具体的には、捕鯨問題などを紹介したが、政治的な問題に踏み込み過ぎないように、あくまでも文章理解の助けになる範囲に話題を絞り、慎重に扱った。

【補足説明例②】

傍線(エ)「世界の解釈の一体系を共有している」とは、目の前にあるものを、それは何であるかと意味づけし、区分けをする、その認識パターンの一つを、わたしたちが、共有しているということ(指導書にあり)。

【補足説明例③】

傍線(オ)「政治的」とは、選挙や国会などといった意味での政治を指しているわけではない。解釈の規準を共有できるものを「普通(自然)」、共有できないものを、一方的に「普通(自然)」でないと決めつけて排除・否定するのが、政治権力による一方的な権力の行使に似ているから、「政治的」という言葉を用いているのである。

ところで、生徒が使用していた国語辞典の「政治」の項には、「住みやすい社会を作るために、統治権を持つ(委託された)者が立法・司法・行政の諸機関を通じて国民生活の向上を図る施策を行なったり治安保持のための対策をとったりすること。」と書かれて

おり、この記述をそのままではめただけでは文意を理解できない。ここでは、辞書の記述が不十分だということではなく、その言葉がどのような状況で使われたかによって、言葉の意味は変わるということを理解させることが重要であると考えた。そのため、生徒達に「コンテキスト（文脈）」という概念を理解させることを目論み、「A君がB君に向かって「バカ！」という場合と、「可愛い女の子がA君に向かって「バカ♡」とささやく場面では、同じ「バカ」でも意味が違っているという例をあげて説明した。^⑬

また、実際の授業では、A君、B君に、実際の生徒を当てはめて説明したが、この際、普段は学習意欲に乏しいような生徒を指名したところ、積極的に授業に参加しようとする姿勢がみられ、授業が盛り上がった。このような場面で、授業者と意欲に乏しい生徒との距離を縮めておくことで、生徒指導上の効果も期待できよう。

(五) 評価

評価方法は、定期テストの点数に漢字の小テストや提出物の提出状況を加味して行った。定期テストの問題は、授業内容を踏まえたものにすると同時に、一学年統一問題で実施するため、採点基準がぶれにくいものにする必要があった。^⑭

評価問題の一例を紹介する。

傍線部（オ）「わたしたちが自分の存在に形を与えていくこの

プロセスは、だから同時に、きわめて政治的なプロセスでもある」とあるが、「わたしたちが自分の存在に形を与えていくこのプロセス」が「政治的」であるというのは、なぜか。「政治的」という言葉の使い方に注意して答えなさい。

解答例。

自分と解釈の規準を共有できるものを一方的に「普通（自然）」とみなし、共有できないものを一方的に「普通（自然）でない」と決めつけて排除・否定するのが、政治権力による一方的な権力の行使に似ているから。

定期テストであるため、授業の内容を反映した問題にしたが、授業の内容を暗記してさえいれば正解できてしまうという欠点がある。そのため、言葉の意味を規定するのはコンテキストであるということとを本場に「理解」した上で文章を読解する力が付いたのかどうかを確かめることはできない。また、生徒が誤答をした際、単に記憶が不十分であったのか、読解力が身につけていないのかの判別も難しい。漢字の書き取りや文学史の知識については暗記しているかどうかを問うことに意味もあろうが、読解力を問う問題はそうではない。これは、私を含めて多くの国語科教員が抱えているジレンマではないだろうか。これに対する私なりの解決策を一例ではあるが、次章で報告する。

三、評論文指導の実践例② ー 現任校の場合 ー

対象…名古屋大学教育学部附属高等学校第二学年（二〇〇七年

度）

科目…国語表現Ⅰ

使用教材…鷺田清一「自分・この不思議な存在」¹⁷⁾

ねらい…¹⁸⁾ a. 漢字の読み書きや語彙力の向上。

b. 評論文を正確に読解する力をつける。

c. 抽象的な内容について考えることで、思考力をつける。

d. 教師の説明を一方的に聞くのではなく、生徒自身が自分の意見を表現したり、他の生徒の意見も聞き、話し合ったりする力をつける。

前任校とは、生徒の学力、学年などが異なるが、それ以上に決定的に異なる点は、受講者数である。選択授業のため、通常の四十人学級ではなく、八名という極めて少人数での授業である。前任校での実践例同様、一部分に絞って紹介する。教材の該当箇所を引用する。

（ここで「ピュア」や「クリーン」とは、汚染度ゼロということと、つまりは、混じり気のないこと、異質なものが混入してい

「理解」のための評論文指導

ないことを意味する。そうするとそこには、身体の衛生的な管理への意識だけでなく、さらに、異物をたえず摘発し続けるでは自分の存在を保持できないような、そういう（わたし）の衰弱した状態が映し出されてもいるようだ。というのも、（カ）自己同一性の免疫力が低下しているからこそ、自分ではないもの、異質なものを一種のウイルスとしてとらえ、身体の内部あるいは表面から、身体を取り巻く環境から、そういう異物を徹底的に排除していこうとすると思われるからである。

こうした清潔シンдрームについては、ジャン・ボードリヤールが現代の文明的徴候として次のように解釈した。人体をあらゆる菌感染から保護するために、環境をテクノロジカルに純粋化することで、人間の内的免疫システムを補強しようとするばするだけ、人体は自己防衛のシステムを退化させ、ますます人体を外保から守る必要が出てくる。人体はそういう透明な覆いのおかげで、皮肉にも免疫不全の状態に陥ってしまうというのだ。（キ）浸透不可能な壁の隔たりを設置することが、壁の内部を脆弱にするというパラドックス、これは文化全体についても言えるだろう。（二二八頁九行目ー二二九頁七行目）

（一）範読→（二）教師が作成したレジュメを用いて説明及び発問→（三）生徒の質問、意見発表、意見交換など→（四）教師の補足説

明↓(五) 評価、という手順で授業を展開した。四十人を対象とした授業では講義形式が中心になるが、この授業は、板書をノートに写させるといふことはせず、レジユメを作成し、大学のゼミに近いような討論形式をとった。

(一) 範読

読み方がわからない漢字に振り仮名をつけるよう指示した上で、教師が範読をする。難解語については、レジユメの中で示すに留め、意味調べは、各自でやっておくよう指示した。

(二) (四) 説明及び発問 (実際には、(三)も同時展開)

【例①】

傍線部(カ)「自己同一性(アイデンティティ)」とは、「自己の位置付け、自分は自分だ」という確信^⑧のことであると説明した。

この際、

わたしたちはわたしたちでない人を知ることを通してしか、自分自身を知り得ないのだから。が、わたしたちは自分はだれかという問いを自分の内部へと向ける。

(一一二五頁一行目―二行目)

といった他の箇所の記述にも触れながら、将来の進路をどうするか、自分がどんな分野に向いているか、などを考える際に本教材に書かれている思考方法が役立つこともあるのではないか、という進

路指導とも関連する話題にも言及した。

【例②】

傍線部(キ)にある「パラドックス(逆説)」とは「一見矛盾、実は真理」、つまり言葉の上では理屈に合わないようだが、よく考えてみると真実を言い当てているといった論理^⑨」のことで、「負けるが勝ち」「急がば回れ」等のことわざも「逆説^⑩」の例であると説明した。

紹介した二つの例は、重要語の説明の場合である。これら以外にも、段落と段落の関係や、その段落が文章全体のなかでどのような役割を担っているかを考えさせたりもした。文章の読解には、ひとつひとつの言葉の意味に拘る徹視的な視点も文章全体の構造を捉える巨視的な視点もどちらも欠かせないものであろう。

(五) 評価

定期テストの問題は、授業内容を踏まえたものにすると同時に、表現力も問うことができるもの考えた。採点を担当する教員が一人で、受講者も少ないため、自由記述問題などを積極的に出題した。評価問題の一例を紹介する。

傍線部(キ)「浸透不可能な壁の隔たりを設置することが、壁の内部を脆弱にする」というパラドックス、これは文化全体についても言えるだろう。」とあるが、「清潔シンдрーム」以外に、

このような「パラドックス」現象が起こっているものとして、どのような例があるだろうか。思いつく具体例をあげ、「パラドックス」現象が起こっているということをわかりやすく説明しなさい。

このような問題であれば、授業内容を踏まえつつも、単なる暗記ではなく、「パラドックス」という概念がどのようなものか「理解」しているか、文章を読解する力がついたかどうかを問うことができる。その上、記述式の解答を求めることで、表現力も問うことができる。また、生徒が誤答をした際でも、生徒がどこで躓いているのかを把握しやすい。

実際に生徒が書いた答案を、本人の了解を得た上で紹介する。

【解答例①】

わたしたちの日常生活における機械化は、人が作業を早く、簡単に、しかも間違いなく進められるようにし、一見人間の能力を高めているように見える。しかしひとたび機械が使えなくなると本来ならできることが困難になるといって、人間の能力は逆に退化しているといえる。ここに「パラドックス現象」が生じている。

【解答例②】

野生の動物の保護のことが言えると思う。あまり人間が手をか

けてしまうと、逆にその動物はそれに甘えて、本来ある動物の能力の低下につながり、自立できなくなってしまう、もつと人間がめんどろを見なければならぬという現象例。

【解答例①】は、「機械化は人間の退化である」と先に述べ、その後、どうしてそういえるのかということパラドックスの概念に則して説明すれば、よりわかりやすい解答になるであろう。【解答例②】も、「野生動物を保護すると動物は暮らしにくくなる」ということを先に述べてから、説明すればよりわかりやすい解答になるはずである。改善の余地もあるものの、どちらも高校二年生としては優れた解答である。このような優れた解答があった一方で、「パラドックス」という概念が全く理解できていない解答を書いた生徒や全く未記入の生徒もおり、このような生徒を減らすことも今後の課題である。

文章の内容や語句の意味(概念)を理解した上で、同様の現象が他にも起きているということ認識し、さらにはそれを自分の言葉で表現するというかなり多くの能力が要求される高度な問題であった。このような出題を繰り返せば、授業の内容の暗記のみにとどまらず、読解力や表現力を高めることに繋がるのではないかと思われる。

ただし、教室に四十人前後の生徒がいる授業や前任校のような学

級数が多い学校では、採点日を設けたり、テストの実施日から成績入力までの期間を長くするなどの措置をとらない限り、難しい指導方法かもしれない。また、センター試験や、その影響下にある模擬試験においては、記号選択式の問題も多く、読解力に加えて、長く紛らわしい選択肢の中から短時間で正解を見抜くテクニックを磨く指導も必要ではある。

おわりに

本稿は、前任校及び現任教における実践の報告である。前任校は典型的な公立普通科高校といえるし、現任教は国立大学の附属という、ある意味では特殊な学校である。前者では、多数の生徒達に講義中心で難解な評論文を理解させるにはどうすればよいかを追求し、後者では、少人数の授業においてこそ可能になる指導方法に挑戦した。難解な語や概念の説明では、なるべく生徒が興味を持つような具体例を紹介することを心がけ、テスト問題の作成の際には、単に評価のためだけではなく、真に生徒の学力向上に繋がるような問題作成を工夫した。

また、実際に教育現場に身を置いてみて、進路指導や生徒指導、さらには生徒募集などの諸問題を無視して教科指導が成立しえないということ、強く感じている。とりわけ、普通科高校では、大学

受験対策を抜きに教科指導を語ることはできない。受験指導の二一ズにも応えつつ、同時に、大学入学後、さらには大学卒業後にも通用する学力をつけさせる指導も目指していかなければならない。これらすべての課題をクリアすることは容易ではないが、今後も様々な実践をしていきたいと考えている。

注

- ① 愛知県立岡崎東高等学校。全日制課程普通科（二〇〇八年度より、総合学科の設置が決定している）、第三学年八学級、第一・二学年七学級（二〇〇七年度の場合）を置く。以下、「前任校」とする。
- ② 名古屋大学教育学部附属中・高等学校。高校（全日制課程普通科）に各学年三学級、中学に各学年二学級を置く。以下、「現任教」とする。
- ③ 「大学全人」とは、大学の入学定員の総数が志願者の総数を上回る状態のこと。全入時代に入る時期について、中央教育審議会は二〇〇七年度を予測していたが、二〇〇七年八月九日に公表された文部科学省の学校基本調査（速報）によると、「大学・短大の今春の入学人数は69万8215人だったのに対し、志願者数は計77万1660人」（読売新聞「二〇〇七年八月十日、朝刊」で、未だ大学全人には至っていない。「同省では、「全入時代がいつ始まるのかは予測出来ない」としている。「同」）。
- ④ 「県が公表した平成十九年度学校基本調査結果（速報）」によると、十九年三月の中学校卒業者の高校進学率は97.0%（前年度比0.2ポイント増）、高校卒業者の大学等への進学率は57.7%（同2.0ポイント増）となり、いずれも過去最高を記録した（「中日新聞」二〇〇

七年八月十四日、朝刊、県内版)。愛知県に限定したデータではあるが、中学校卒業者のほぼ全員が高校に進学する状況にあることがわかる。

⑤ 富山県の県立高校で三年生の全生徒が二年時に必修科目の一部を履修していなかったという報道(「読売新聞」二〇〇六年一月二十四日、夕刊)を皮切りに、同様の問題が全国の学校で次々に明るみに出た。同年十月三十一日には、この問題に関連して、茨城県の県立高校の校長が自殺するという痛ましい事件も発生した。

⑥ 大阪市の私立高校が受験料を負担した上で「2006年度の大学入試で、成績が優秀だった1人の男子生徒に志望と関係のない学部・学科を多数受験させ、合格実績を事実上水増ししていた」(「読売新聞」二〇〇七年七月二十一日、朝刊)という問題。その後、同様のことが他校でも行われていることが明らかになった。

⑦ 稲賀敬二・竹盛天雄ほか二六名編『高等学校 国語総合』(二〇〇四年、第一学習社)所収。初出は、鷲田清一「じぶん・この不思議な存在」(一九九六年、講談社現代新書)四十六―五十六頁。

⑧ 『高等学校学習指導要領(平成11年3月)』(一九九九年、財務省印刷局)の以下の部分と重なる授業内容である。(第2章 普通教育に関する各教科/第1節 国語/第3 国語総合/2 内容)より抜粋)

C 読むこと

ア 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること。

イ 文章を読んで、構成を確かめたり表現の特色をとらえたりすること。

エ 様々な文章を読んで、ものの見方、感じ方、考え方を広げたり深めたりすること。

〔言語事項〕

「理解」のための評論文指導

イ 文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること。

ウ 常用漢字の読み慣れ、主な常用漢字が書けるようになること。

⑨ 引用は、初出(注⑦前掲書)ではなく、教科書(注⑦前掲書)により、頁・行も同書によった。以下、同教材の引用をする場合は、すべて同様。

⑩ 稲賀敬二・竹盛天雄ほか二六名編『高等学校 国語総合 指導と研究 第3分冊・現代文編』(二〇〇三年、第一学習社)。「評論③(自分・この不思議な存在)」の項は、鈴木章弘の執筆による。

⑪ 山田忠雄ほか四名編『新明解国語辞典 第五版(特装版)』(一九九八年、三省堂)

⑫ 同教材の二二四頁一六行目に「具体的なコンテキストに則して検証していく」という記述があり、この箇所と関連させて説明した。

⑬ 浅野直樹・榎吉郁夫『現代文キーワード読解』(二〇〇五年、Z会出版)「第3章 言語/テキスト・コンテキスト」の、「同じ「バカ」という言葉も、ケンカの最中と、デート中とでは、当然意味合いが異なってくる。テキストの意味は、コンテキストの中で決まるのである。」という説明を参考にした。

⑭ 授業中の小テストは、授業時間が奪われたり、自主的な学習姿勢が身につかなくなる恐れもあり、その質と量は、生徒の学力や学習姿勢を考慮しながら慎重に決定するべきであろう。しかしながら、保護者の視線を意識してか、あるいはそれ以外の理由があるのかもしれないが、かなり頻繁に実施する学校も現実には多いようである。教科指導の背景に様々な要因が存在するという一例である。類似のことが大学受験対策の補習授業などでもいえると思うが、多くの学校が生徒募集に苦勞している昨今の状況を考えると、軽々に批判はできない。

⑮ 前任校は、一学年に八学級が置かれており、複数の教員で担当していた。従って、授業者Ⅱテストの採点者が複数存在するということになる。ここでいう「読解力」とは「文章の内容を正確に読み取る能力」といった程度の意味で用いている。

⑯ 副教材としての使用である。これとは別に教科書も使用している。

⑰ 『高等学校学習指導要領（平成11年3月）』（注⑧前掲書）の以下の部分と重なる授業内容である。（第2章 普通教育に関する各教科／第1節 国語／第1 国語表現Ⅰ／2 内容）より抜粋）

ア 自分の考えをもって論理的に意見を述べたり、相手の考えを尊重して話し合ったりすること。

エ 様々な表現についてその効果を吟味し、自分の表現や推論に役立てること。

オ 国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ち及び言語の役割について理解を深めること。

⑱ 生徒達が持っている生徒手帳の学生証を例にあげ、「身分証明書を「IDカード」というが、この「ID」はアイデンティティの略である。自分が何に所属しているのか、自分はどういうような人間なのか、そういうことを自分自身で理解して、私が私であるということを確信することがアイデンティティである。」（注⑬前掲書「第5章 哲学・心理／アイデンティティ」という説明もした）。

⑳ 牧野剛ほか四名『ことばはちからダ！ 現代文キーワード ―入試現代文最重要キーワード20―』（二〇〇一年、河合出版）「第一章 読解語／7 論理・修辭／逆説」による。

㉑ 注⑳に同じ。

㉒ OECD生徒の学習到達度調査（PISA）においても、「書かれた情報から推論して意味を理解する」「テキストの解釈」（文部科学省「読

解力向上に関する指導資料「PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向」）、二〇〇六年、東洋館出版社）はもちろんのこと、「書かれた情報を自らの知識や経験に位置付ける」「熟考・評価」（同）の力が求められる。本稿で報告した指導方法は、「PISA型読解力」の向上の一助にもなるのではないだろうか。

尚、「PISA型読解力」については、前述の文科省による報告書のほか、石原千秋『国語教科書の思想』「第一章「読解力低下問題」とは何か」（二〇〇五年、ちくま新書）や、『日本語学』（第二十四巻第七号、二〇〇五年六月）、『月刊国語教育』（第二十七巻第四号、二〇〇七年六月）、『教育科学 国語教育』（第六八六号、二〇〇七年十一月）の特集等に詳しい。

【付記】

本稿は、二〇〇七年度同志社大学国文学会研究発表会（二〇〇七年六月二十四日）における口頭発表をもとにまとめたものである。席上、多くの方から様々な意見を頂戴した。また、前任校及び現任校の生徒諸君の存在なくして、本稿は存在しない。皆様に、深く感謝いたします。